

題目：自己教育力を育む読書指導の在り方についての一考察

～学級経営的観点から～

指導教官 山口健二

発表者 恩村祐紀

I. 題目設定の理由

平成14年度から実施されている新学習課程において、児童・生徒に「生きる力」の育成を図ることが大きなねらいとして提言された。そんな中、読書活動を推進することが注目されてきている。代表的な読書活動である「朝の読書」は全国的な広がりを見せている。青少年の読書運動の推進のための法律まで作られた。そこまでして、読書活動を子どもたちに求めるのはなぜであろうか。

そこで読書をすることでどのような能力が育つのか。またどのような読書指導が行われているのか事例を参考にし、私が担任になった時にどのような読書指導を実践すべきか考えたいと思い、本題目を設定した。

II. 論文構成

はじめに

第1章 情報化時代の読書指導の課題

第1節 朝の読書が与える教育的効果

第2節 情報化における読書機会の減少

第3節 これからの学校教育の在り方と読書指導

第2章 学校における読書指導の実践事例

第1節 京都府八幡市立美濃山小学校の実践事例

第2節 東京都八王子市立松木中学校の実践事例

第3章 自己教育力を育む読書指導の在り方と考察

第1節 自己教育力を育む読書指導

第2節 自己教育力の育成を図る学級経営

第3節 学級における読書指導の考察

おわりに

III. 論文内容

第1章 情報化時代の読書指導の課題

第1節では、全国的な広がりを見せた「朝の読書」について述べた。「朝の読書」は1988年に千葉県の高校で始まり、現在では全国の小・中・高の52%にあたる20,157校が実施している。「朝の読書」には、読書時間の確保だけでなく、心を落ち着かせ、朝の会を円滑にする効果がある。短時間の朝の会と言っても、次に授業や他の学習活動、学校生活に波及する。第2節では、情報化における読書機会の減少について述べた。第3節では、これからの学校教育の在り方と学校における読書指導の実状について述べた。文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』などを参照し、読書指導の充実が求められる現状について確認した。

第2章 学校における読書指導の実践事例

第1節では、「ブックウォーク」に取り組む小学校の実践を取り上げた。「ブックウォーク」とは、子ども自身が期間・読み方・読む量を決めて行う読書活動であり、読書への意欲を高めることを目的にしている。子どもたちの日常生活の中で、自分に合った目標を立て、計画する機会は少ない。自分の実態と取り組む期間を踏まえて、少し頑張ったら達成できそうな目標を立てることができるようになる。見通しを持つ力は、読書に限らず、様々な学習場面で必要となる。

第2節では「生徒によるブックトーク」に取り組む中学校の実践を取り上げた。「ブックトーク」とは、あるテーマの下で、数冊以上の本を順次紹介していく手法である。松木中学校では、読書スピーチを行った後、以

下5段階の指導で「生徒によるブックトーク」を行っている。①テーマを決める→②グループ作り→③テーマの解釈を話し合う→④選書する→⑤発表会を開く。級友の薦める本というのは単独に本としてではなく、学校という日常生活の中の人間関係と関連することで、より強力な出会いとなる。

第3章 自己教育力を育む読書指導の在り方と考察

第1節では、まず自己教育力の構造について考察し、自己教育力を育むためにどのような指導を行えばよいか述べた。自己教育力は「学習意欲」「学習方法の習得」「自己表現力」から構成され、それらを育む指導が必要である。

第2節では、自己教育力が育成されるための学級経営の在り方について述べた。ここで教師を含めた学級構成員の受容的人間関係が大きな役割を果たしているということが明らかになった。自己教育力を育成するためには受容することを基本とした学級経営、受容主義の学級経営が必要である。

第3節では、学級経営的観点からどのような読書指導を行うべきか年間指導モデルを提示した。詳細は省略するが3つの活動を柱とする指導モデルである。5月にブックウォークを行う。ブックウォークは自分の成長や変容が形として明確に見えるので、達成感を得やすい。自分の読書量や読書傾向を意識して目標を設定するため、自分にあった課題設定力が身につく。4月から朝の読書を始め、ある程度の習慣がついてきた5月にブックウォークを行うのである。10月には心に残る一冊の感想や紹介などを行う「心の虹」を行う。「心の虹」は意識的に学級内での「読書を通じてのコミュニケーション」を支援する試みである。本を読んで感動したとか面白かったという経験は、自分の内で自己完結して終わるものではない。すばらしい感動経験こそ、他者と共有したいという思いが誰にでもあるはずである。他者と交流することで自らの視野を広げ、自らの存在を確かなものとして見つめなおす取り組みなのである。2月にはブックトークを行う。級友の発表を聞き、その中に上手な点、好ましい点などを感じ取り、それを自分の発表にも生かしていくことで互いの個性を磨き合う。

この指導モデルで目指したのは、①学習意欲が持てる読書活動であること、②人間関係が深まる読書活動であること、③耳を傾ける態度などの学習態度が育つ読書活動であること、である。

IV. 今後の課題

本論文では、自己教育力は「学習意欲」「学習方法の習得」「自己表現力」の三要素から成立すると考察した。しかし、「学習方法の習得」は教科学習による調べ学習・情報読書によって身につくものである。学級経営に重点を置いた本論文は、「学習方法の習得」について深く考察することができなかった。より大きな視点で自己教育力を育む読書指導を考察しなければならない。

これを今後の課題とし、教師として読書指導を実践していく中で自己教育力を育む読書指導について検討し、よりよい指導方法を模索し続けたい。

V. 主要参考文献

- ・長倉美恵子編著『子どもの読書活動をどう進めるか』、教育開発研究所、2003年
- ・米谷茂則『児童主体の創造を表現する読書の学習』、高文堂出版社、2002年
- ・林公『朝の読書 実践ガイドブック』、メディアパル、1997年
- ・井上一郎編著『ブックウォークで子どもが変わる』、明治図書出版、2005